

# 博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成28年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機関名	大阪大学	整理番号	J02
プログラム名称	インタラクティブ物質科学・カデットプログラム		
プログラム責任者	河原 源太	プログラム コーディネーター	木村 剛
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・計画を確実に実施しており、採択時及び中間評価時における留意事項やフォローアップにおける指摘事項に対して具体的かつ継続的に対応することによって、「インタラクティブ」をキーワードにした特徴あるプログラムの深化、改善が図られている。また、本プログラムの趣旨を十分に理解して、高い意識を持った学生が数多く育っていることがうかがえる。</li> <li>・産学官民参画による修了者のグローバルリーダーとしての成長・活躍の実現性については、企業との連携体制構築のために「カデットテーブル」を設け、企業との意見交換による本質課題の洗い出し、企業とのテーマ共創の試行等を行っており、産学における恒常的な共創関係の創出が期待される。また、本年度末に修了予定の第1期生(5名)は企業への就職が内定しており、産業界のリーダーとなり得る博士人材養成の趣旨が浸透しつつあるといえる。</li> <li>・中間評価の第1の留意事項である日常的な国際交流の場や環境を整える工夫については、3か月間の海外研修の履修、招へい外国人教員による英語講義、所属研究室の外国人研究者・留学生との日常的な交流や海外連携大学との合同シンポジウム(平成29年度)が実施(予定)されており、国際突破力の向上が期待される。</li> <li>・中間評価の第2の留意事項で指摘された多様な学生の確保については、プログラム開始時に比べて、他大学出身者、留学生の受入数は概ね増加している。なお、学生の多様性についてプログラムに参画している9専攻全体と比較すると、平成28年度の本プログラム学生数における他大学出身者の比率は13%であるのに対し、プログラム参画9専攻全体における比率は11%である。同じく、平成28年度の本プログラム学生数における留学生の比率は13%であるのに対し、参画9専攻全体における比率は9.2%であり、本プログラムは高い割合で留学生を受け入れているといえる。              一方、本プログラム学生数における女性比率は平成27年度は10%、平成28年度は0%であり、参画9専攻全体における比率(7.7%、11%)に比べると平成28年度は低い。次年度以降の動向を注視したい。</li> <li>・中間評価の第3の留意事項である課題解決型の要素を現行プログラムに取り入れる工夫については、本年度より研究室ローテーション・国内研修・海外研修やコースワーク科目のキャリアアップ特論・科学史においてシラバスに課題解決型学習の趣旨を明記するなど、学生及び担当教員への意識付けを行っている。また、研究室ローテーションが課題解決型の学習の場になっていることは支援学生との意見交換から確かめられた。</li> <li>・中間評価の第4の留意事項であるカデット同窓会の整備については、大阪大学の教育・学生支援部、卒業生室、経営企画オフィスと連携して5つのリーディングプログラムがそれぞれ同窓会を組織する取組として着実に進行しており、博士人材動向の生涯追跡、大学院教育の改善・施策への反映等が期待される。</li> <li>・学生が自発的に企画して取り組んでいる自主活動として、カデットコロキウム(学生の研究紹介)、国際シンポジウム、他大学合同リーディングセミナー、物性物理100問集の改訂・出版事業等が行われており、企画力、統率力などリーダーとしての素養</li> </ul>			

を身につける環境をプログラムが提供している点は評価できる。

## 2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）

- 学生間の交流や対話が一部に留まり、学生の自主活動も参加者が全体に広がっていないように思われる。いろいろな自主活動の意義・面白さを本プログラム学生全体に広げていく工夫が望まれる。また、若手メンターは学生個人の支援に重要な役割を果たしているが、学生間の繋がりをつくる支援にも一層の配慮があるとよい。
- 海外研修、国内インターンシップを必修として全員に履修機会を与えており、海外研修では外国生活の体験というレベルを越えてグローバルなリーダーの視点を学ぶことやインターンシップが異分野や異なるジャンルの業務を体験する場になることが望まれる。
- 本プログラムは、高い専門性ととともにリーダーとしての優れた能力を有する学生の養成のために、「リーディング大学院」という質の保証されたブランドを構築する学位プログラムである。「リーダーの質」の評価基準についても十分議論いただき、よりよきプログラムに進化させていただきたい。